

# 視点

## 秋入学と国際化の実現には クォーター制の導入が必須

●インタビュー  
**田中愛治** 早稲田大学 理事(教務部門総括)  
政治経済学術院教授



たなか・あいじ ●政治学博士。75年、早稲田大学政治経済学部卒業。85年、オハイオ州立大学大学院で博士号取得。青山学院大学助教授などを経て、98年に早稲田大学政治経済学部教授。グローバルCOE「制度構築の政治経済学」拠点リーダー。教務部長や早稲田ポータルオフィス長など歴任。

早稲田大学は、来年度から学期を四つに分ける「クォーター制」の一部の科目を導入する。この動きは、東京大学の秋入学構想に対抗したと見る向きもあるが、早稲田大学は数年前からこの制度の立ち上げを水面下で進めていた。

なぜ今、クォーター制なのか。なぜ今、トップ大学の多くが入学時期や学期などのアカデミックカレンダーを再考するのか。早稲田大学の新学期制度の立ち上げで中心的な役割を果たし、また「大学の国際化を本気で進めるにはクォーター制しかない」と語る田中愛治教授(教務部門総括理事)に、その導入の背景と狙いを尋ねた。

とはなく、この秋入学を実りあるものにするにも、国際化を推進するにも、私たちはクォーター制が不可欠だと考えています。クォーター制を検討するきっかけは、07年に本学が125周年を迎えて、「Waseda Next 125」という新ビジョンと重点施策を決めたことでした。その主眼は、本学の原点に立ち返ること、そして国際化を積極的に推し進めるということで、留学生の数を8000人に増やすという数値目標も掲げるようになりました。また、この年に本学は日本で一番多くの留学生を受け入れる大学にもなりました。数の上では、東京大学よりも受け入れ留学生の数が多くなり、27000人を超えました。

世界中の大学に留学へ  
クォーター制なら  
クォーター制の導入は、いつから検討していたのですか？  
田中 2008年からです。私も多くの議論と準備を重ねた末、来年度からクォーター制という新しいアカデミックカレンダーを導入することにしました。

高校の先生や受験生は、本学に対して、国際的なイメージをあまり持っていないかもしれませんが、キャンパスを歩くと外国籍の学生があちこちで見られ、とても国際色豊かです。これは留学生を積極的に増やしてきたからこそです。その留学生の数を3倍以上に増やそうというわけです。8000という数は、本学の学生数の2割

弱に相当します。これは、アメリカのトップレベルの大学の多くが、約2割の外国籍の学生で占められていることを考慮して決めたものです。それぐらいの数の頭脳を世界から集めないと、国際的な大学のレベルを維持できないだろうということですね。  
そこで、「Waseda Next 125」で、我々は世界中をキャンパスにする構想を謳いました。本学の学生は海外のどの大学にも行けるし、かつどの大学からも学生を受け入れられるようにする。そんな環境を整えたいと表明したわけですね。  
クォーター制を検討したのは、どのような理由からでしょうか？  
田中 大きな問題が二つ浮上したからです。一つ目は、欧米の大学が留学生向けに開講することの多いサマースクールが、本学の学期と対応していないこと。もう一つは、海外の一流の先生を夏季集中授業などに呼びたくても、やはり学期の都合で合わないこと。いずれもアカデミックカレンダーの問題で、本気で国際化をするには、これを変えなければなりません。その問題意識を、08年の時点で私ど

もは具体的に認識しました。欧米のサマースクールは、6月中旬ぐらいから始まります。中国やシンガポールの大学も同じです。このサマースクールに本学の学生を多く送り出したいのですが、今のアカデミックカレンダーだと無理なのです。本学は、通年科目以外にも、春学期または秋学期だけで単位を取得できるセメスター科目を全学部で開講していますが、それでも授業が7月の終わりまである。

しかも、文部科学省が授業時間を数をきちんと確保するように強く求めようになり、本学も、夏休み前と後で15週ずつの授業を確保するアカデミックカレンダーを09年度から厳密に確立しました。

このとき、すでにクォーター制を視野に入れ、同年11月にアカデミックカレンダー検討委員会を立ち上げ、座長は当時の教務担当常任理事の土田健次郎副総長となり、私が事務局長となりました。留学制度やセメスター科目を積極的に導入している学部の教務主任などにも集まってもらい、10人ほどで1年ぐらい議論をしました。そのとき、世界中の主な大学の

学期の切れ目も調べ上げたのです。例えば南半球のオーストラリアとニュージーランドは新年度が2月の頭から始まり、夏休みに入るのは11月の下旬です。また、アメリカのクォーター制は、新学期が9月の下旬から始まり、これは本学の秋学期開始と同じタイミング。春も、アメリカのクォーター制は3月下旬スタートで、日本の年度始まりとだいたい同じでした。

どうしても合わないのが、先ほど話したサマースクールです。アメリカは6月の中旬ぐらいから始まります。また、オセアニアのサマースクールは11月の下旬ぐらいに始まります。どちらも、本学では学期の途中なのです。

また、学生の中には1月下旬の期末試験を終えて、2月の初旬にオセアニアに留学する者もいます。1年間の留学だと、11月下旬に帰国できるのですが、秋学期の途中なので復学は4月まで待たなければなりません。

このような問題を解決するには、おそらく答えは一つしかありません。各学期をそれぞれ真ん中で半分にしてクォーター制を導入するのです。そうすれば、欧米のサマー

スクールを受講できるようになり、オセアニアに留学した学生は11月下旬から本学の授業を再開できる。他の国の大学の学期にも広く対応できる。クォーター制というのは万能ではないか。委員会を立ち上げて1年後には、そんな確信を持つようになり、09年の夏から秋にかけて、全学部の教務主任が集まる会議でそのメリットを報告しました。

### 学生と教員のメリットが 成否を分ける

クォーター制導入のGOサインが出たのは、いつだったのですか？

田中 本年(12年)5月の学術院長会ですね。その前の11年度に、セメスター制科目を全学部で実質的に開講するようになり、1年が過ぎて、学期を短く区切るメリットがあるということで、本年5月



の学術院長会でクォーター制もやろうと決まりました。

翌月の学術院長会では、運用はセメスター制の中で行うこととし、名称は「春学期前半」「春学期後半」「秋学期前半」「秋学期後半」として区切ることを全学部で合意しました。

今、国際化を考える大学にとつて、アカデミックカレンダーを再考するのは、必然的な流れだと思えます。ただ、東京大学は、私どもとは逆で、学内手続きを進める前に公表されました。これから議論を重ねていかれるのだと思いますが、私どもは学内の合意を得るのに3年半かかりました。

——東京大学の構想は、秋入学の本に絞るようですが、ご意見は？

田中 他大学の方針についてコメントは控えたいと思いますが、本学では、98年の大学院アジア太平洋研究科の開設以降、順次秋入学を導入し、現在は7学部14研究科で秋入学の学生と春入学の学生を混在させながら国際化を図っています。ですから、秋入学に反対したことはありません。

あえて言うくと、本気で秋入学を実現し国際化を推進するのであれ

ていけるのなら履修すればいいし、留学生でも日本語の授業についていけるのなら受けてみればいい。

だから、教員の負担はそれほど増えない。むしろ、3クォーターを教えて、残りの1クォーターは研究に集中するということも可能になる。この点を教員の方たちに何度も説明して分かってもらうことが、導入に際しては、とても大事なところでした。

——ゼミなど通年科目が必修だと、クォーター科目がいくら増えても留学できないのでは？

田中 ゼミは通年ですが、留学は自由にできる仕組みを整えています。私のゼミでも、毎年、数人の学生が留学し、今年度も18人中4人が留学中です。本学の教員は、ゼミの学生が留学をしたい場合は、積極的に送り出しますし、帰国したらすぐに受け入れます。

他の通年科目でも、例えば前期が終了してから1年間の留学に出た場合、翌年度の後期に同じ科目を登録すれば単位を認められるようにしています。このやり方は20年以上前からやっています。単位認定も柔軟に行います。例えば、海外の大学には「日本国憲法」とい

ば、クォーター制が必須だと考えます。ある一部の方からは、入学回数もアメリカのクォーター制のように4回であるべきだと指摘されるのですが、完全にアメリカ型のクォーター制を再現する必要はないと思っています。実情に合わせ、大学のポリシーをきちんと持つて、独自のクォーター制を築けばいいのです。成否を分けるのは、その大学の学生と教員の両方にメリットがきちんとあることだと思います。

### 教員の負担はそれほど増えない

——入学時期を増やしたり、学期を多くすると、同じ授業を年に何度も聞かなくてはならず、教員の負担が倍増するのではないですか？

田中 その懸念はよく言われるのですが、年に何度も同じ科目を開かなくても大丈夫なのです。私は、アメリカの大学院で9年間を過ごし、博士号を取り、助手としてアメリカの大学で教えていましたからよく知っていますが、アメリカの大学では入学時期が何回あっても、同じ授業を各学期に用意することはしません。

う科目はまずありませんが、学生が「アメリカ憲法」や「スウェーデン憲法」の単位を取れば、教員が内容を確認した上で同等の科目として認める場合もあります。最近では、学生が履修した科目が本学にない場合は、その海外の大学でどのように位置づけられているかを考慮し、本学の同じような位置づけの科目として認定する学部もあります。それぐらい柔軟にしないと国際化は推進できません。

### 純ジャパが国際化する大学になるために

——クォーター科目は、どのように作るのでしょうか？

田中 セメスター科目を變形する形で導入することになると思います。セメスター制の科目には週2回授業を行う4単位のものと、週1回のみ2単位のものがあります。私も政治経済学部で4単位のセメスター科目を教えています。15週で30回の授業を開いて、16週目には期末試験という流れです。7・5週ぐらゐのときに中間試験を実施するのですが、この中間試験のところを2つに分けてパート1・2とすれば、クォーター科目



例えば、私はアメリカで政治学の大学院に入学したのですが、必修科目の中に3つのレベルの統計学がありました。私は個人的な事情で冬学期から入ったのですが、その学期では統計学Iは開講されていませんでした。だから、統計学IIを受講して、その後に統計学IIIを受講し、それから一番やさしい統計学Iを履修しました。別の大学院で統計学を少し学んでいたで、何とかなりました。

授業についていける科目なら、IIやIIIから始めればよい。逆に、

になります。内容を工夫すればパート2を先に教えて、パート1を後で教えることもできます。

科目にもよりますが、多くのセメスター科目は、このようにクォーター科目に分割できるはずですが。また、週1回授業の2単位セメスター科目も週2回の授業にすることで2単位のクォーター科目にできるでしょう。ただ初年度は、数としてはそれほど多くはないと思います。各学部が様子を見ながら、それぞれのペースで増やしていくと思われま

セメスター科目なら、通年科目に比べて1学期内で完結する形になっているので、それを半分に割るのは、そう大変なことではありません。クォーター制を視野に入れたら、まずセメスター制を定着させたことが、スムーズなクォーター制への移行を可能にしました。

——高校の先生方や高校生にアピールしたいことは？

田中 本学は、学生の目線で国際化を着実に進めています。留学したいと考える学生がいつでも海外で学べる仕組みを整え、また、海外の大学で学んだことを積極的に認め評価する環境が、ここにはあ

ついていけないのなら、Iが開講する学期まで待ち、その間は別の科目を多く取ればいいのです。つまり、学生の自由裁量と自己責任で履修するという事です。本学も、そのような考え方で授業を開けば良く、各学期に同じ科目を揃える必要はありません。

主に、春に入学した日本人学生に合わせた日本語での講義を中心とした展開と、秋に入学する留学生に合わせた英語での講義の展開の2本立てで考えればいいのです。日本人学生でも英語の授業につ

ります。本学は学生一人ひとりの意欲を尊重しているという点を、ぜひ高校の先生と高校生たちに理解してほしいですね。

来年度からは、通年科目とセメスター科目、クォーター科目が並存することになり、例えばアメリカのサマースクールを受講したい学生は、春の前半のクォーター科目をたくさん取って春の後半に留学すれば、4年間で卒業できるし、就職活動にも影響がない。もっと学びたいことを見つけたら、本学で1年多く学んでもいいし、さらに留学してもいい。

これからの日本は、本当に国際化をしなくてはなりません。その国際化は何かと言えば、それは日本の小中高で学んだ一般的な若者が、外国でも生きていける力を身につけるといふことなのだと思います。私どもは、「純ジャパ」という言い方をしたりするのですが、日本の学校で育ってきた若者こそ、国際化することが今とても重要です。帰国生と留学生のためだけの国際化じゃない。早稲田大学は、日本の学校で育った学生が世界に飛び出していける「純ジャパ」のための大学でもあるのです。